

坂口安吾文学における虚無の美について

王 愛武*

The Beauty of Nihilist in Ango Sakaguchi's Literature

Wang Aiwu

Abstract

For Ango Sakaguchi, the beauty of literature exists in the lonely world of sadness and sorrow of human space. He represents the beauty of emptiness and integrated through a series of works, such as *Wind Doctor*, *Purple Dainagon*, *The under of Full-bloomed of Forest of Cherry Blossoms*, *Princess Yonaga* and *Mimio*, to seek for the ultimate literary aesthetics in his literature. After all, his aesthetic sense of nihilist is consistent with the Japanese spirit, which simplicity and nonexistent are considered very important.

坂口安吾は「美は、特に美を意識してなされた所からは生まれてこない」^①と、文学の美について論述した。それでは、安吾にとって、文学の美とは一体何者だろうか。言い換えれば、安吾文学における“美”の世界をどう理解すればいいのだろうか。

坂口安吾は多編の自伝小説でも、戦争を背景に男女関係を描写する小説でも、幾たびも“ふるさと”という言葉に言及する。“ふるさと”は安吾にとって大切なものであり、その意味が解明されなければならないものである。安吾は「文学のふるさと」(1941年)において、文学の“ふるさと”がどこにあるのかについて論じ、文学の根本的な在り方を解釈している。それは「モラルがないといふこと自体がモラルであるのと同じやうに救ひがないといふこと自体が救ひであります。私は文学のふるさと、或ひは人間のふるとはここに見ます。文学はここから始まる—私はさう思ひます」という、一見矛盾しているような、早口のように反復する論述である。彼はペローの「赤頭巾」の結末に「むごたらしい美しさ」、「氷を抱きしめたような、切ない悲しさ、美しさ」を見出す。文学の美は人間の切ない悲しさと虚空の孤独世界に存在する。「風博士」(1931年)、「紫大納言」(1939年)、「木々の精、谷の精」(1939年)、「桜の森の満開の下」(1947年)、「夜長姫と耳男」(1952年)など、一連の作品の結末に共通するのは虚無と一体化した美の表現であり、「おそらく安吾の美学の究極のものだ」^②とされている。もともと、“虚無”の美意識は簡素を重んじ、無きに如かざるという日本精神と一致するのである。

1931年6月、坂口安吾は『青い馬』に「風博士」を発表して、華々しく日本文壇にデビューした。「風博士」は執拗な口調で書かれ、言葉遣いもやや古びていて、ユーモアと風刺に溢れた小説である。風博士は蛸博士に麗しき妻を寝取られたという恨みを持ち、復讐するために蛸博士の寝室に侵入して、その髪を持ち出して恥をかかせるつもりであったが、失敗に終わる。花嫁を迎える日に、風博士はその姿を「突然消え失せ」させ、一陣の突風となって「階段の下に舞ひ狂ふ」ようになる。そして、「この日、かの憎むべき蛸博士は、恰もこの同じ瞬間に於て、インフルエンザに犯されたのである」という言葉で、小説が幕を下ろす。読者は、風博士が自ら風となってインフルエンザに犯させることによって、蛸博士に復讐したのだと想像が付くであろう。

* 教養部

死が美であるという日本文化の中で成長してきた坂口安吾にとって、姿を消して風となっても、虚空となってもいいから、肉体を含め一切が消えるのは最高の死に方であり、無限の美と繋がっている。安吾は「文学のふるさと」の中で、モラルがないということがモラルであり、救いがないということが救いであると論ずる。その理屈を借りて言えば、意味がないということには意味があり、消えていることこそ永遠に存在する、と推論できるであろう。風博士は風となって消えてしまうのだが、話者の“僕”らにとって、相変わらず永遠に「偉大なる風博士」であり、その姿消しに「大変残念」の気持ちを持つ。読者は風博士の身体消失ということに対しては、新鮮な感覚を持ちながらも、虚無と淡い哀しさを感じ取るかもしれない。

風博士は風に変貌して消失するが、「紫大納言」の場合は人間が水滴に変化して、姿を消すということになる。

紫大納言は落とした小笛を探しに月の世界から降りてきた天女との出会いをして以来、その美貌に魅了される。「燈火のもとではじめて天女のありさま、顔、かたちを見ることができた時、その目覚しい美しさに大納言は魂も消ゆる思ひがした」のである。ここまで読んできたら、日本の作り物語の元祖である「竹取物語」を思い浮かべる。無論、子供向けの童話では、人間が植物か動物かに変貌し、或は植物か動物かが人間に化身するのは当たり前のことだが、坂口安吾のこの一連の小説はどうしても大人向けの小説にしか見えない。彼は豊富な歴史知識と優れた想像力とを生かして、美しい虚構世界を作る。この虚構世界に、彼の美意識が託されている。大納言は天女の小笛を失くしてから、「心はすでに虚空に散り、この現実の妖しさを虚しく訝ふのみだった」。結局、大納言は心の虚しさと悲しさのあまりに、「一握の水たまりとなり、せせらぎへばちやりと落ちて、流れてしまった」。精神状態が虚しくなる以上、肉体の存在があっても無意味であるから、別の物に化身して自然と一体化すればいい、と解釈できるのだろう。

もうひとつ、結末に主人公が別の物に変化して消えてしまう小説を言及しなければならない。それは安吾文学の最高峰の一つと言われる「桜の森の満開の下」である。

「桜の森の満開の下」のヒーローとヒロインには名前がない。坂口安吾はこの二人をただ“男”と“女”と呼称する。確かに、簡単な物事の展開なので、別に登場人物に名前がなくても読者の誤解を招かないものだから、この二人には名前をつける必要がないと思う。そもそも、安吾は長編小説を綴ることが下手で、複雑な人間関係を描写することに長じていない。だから、「吹雪物語」は未完のままで、大失敗。坂口安吾文学の読者を魅了させる長所は登場人物の性質と意思もよらぬ小説展開ということにある。

野人たる山賊の男は女に心を奪われ、その魅力から抜け出ようとしても抜け出られなくて、女に懇望されるとおりに鈴鹿峠から都へと移住する。男は女のために姫君の首やら貴公子の首やら白髪首やら坊主首やらいくつもの首を集め、女はそれらの首を使って人形ごっこのような「首遊び」に興じて倦むことがない。女の「首遊び」は聞いても、ぞっとするむごたらしいゲームで、山賊のむごたらしさよりもおそろしいものである。坂口安吾は「文学のふるさと」では、人間のふるさと、或は文学のふるさとが「むごたらしくて、救ひのないものでありませうか」と書き、むごたらしさを、或はむごたらしさから見出した美しさを文学の“ふるさと”に帰すのである。

男はたちまち都の暮らしに退屈してしまう。「彼は女の欲望にキリがないので、そのことにも退屈していたのでした」。女は男に山に帰るという決心を告げられ、いくら男を説得しようとも納得してもらえないということがわかると、「お前が山へ帰るなら、私も一緒に山へ帰るよ。私はたとへ一日でもお前と離れて生きてゐられないのだもの」という嘘をつく。男は女を背負い、満開の桜の森の下を歩き進むうちに、女が鬼に化けたので、無我夢中でその首を締め付け息絶えさせる。意識を戻した男は冷たさと孤独と無限の虚空を感じ、女の顔の上の花びらを取ってやろうとする時、「女の姿は掻き消えてただ幾つかの花びらになつてゐました。そして、その花びらを掻き分けようとした彼の手も彼の身体も延ばした時にはもはや消え」、残ったのはただの花びらと冷たい虚空であつた。元々、満開の桜が散ることが日本人の意識では最高の美の世界を代表するが、美しい狂気の人と満開の桜が取り合わされ、更に冷たい孤独と無限の虚空とが混ぜ合わされると、凄まじい美の極限に達する。死ということ自体は安吾にとって、単に肉体が腐り意識活動が止まることではなく、一切のものが消え、虚空に帰することである。それゆえ、死ということは恐れることではなく、虚空世界に帰するのだから、最高の美を実現する手段となる。

「夜長姫と耳男」の耳男は飛驒の彫刻匠である。二十歳の倨岸な男であり、飛驒王国の夜長長者に招かれた師匠に代わって夜長姫の持仏造りの腕比べに参加する。一方、夜長姫は「身体は生まれながらに光りがかがやき、黄金の香りがする」十三の少女である。可憐で無邪気に見え、虫も殺さぬ顔をしているのに耳男の真似をして平然と蛇の生き血を飲み、夥しい蛇の死体を逆さ吊りした高樓から、疫病でさききり舞いして死んで行く人々を見下ろしては歓喜する。外貌と内心の一致しない少女である。耳男は姫の清純で可憐な魅力に吸引されながらも、その残酷無情な性質を一步一步把握してくる。姫が人々の大量の死を享樂するというその主体は自然以外にはありえない、それは自然の化身なのだ、と分析する批評家がいる。言い換えれば、夜長姫は本当の人間の肉体を持たず、ただ自然がこの肉体に託されるだけである。その時点までに坂口安吾が作り出した文学世界では、人間が風か水か空気という自然の物に化身するのとは逆で、「夜長姫と耳男」は自然が人間に化身する虚構物語であると言える。最後に、耳男は村人を救うために、姫を抱きすくめて姫の胸に錐を打ち込む。姫は「好きなものは呪ふか争ふかしなければならないのよ。お前のミロクがだめなのもそのせひだし、お前のバケモノがすばらしいものもそのためなのよ」などと言って、目を閉じる。夜長姫は死という道を辿り、自然に戻るわけである。耳男も姫を抱いたまま、気を失って、倒れる。人間（耳男）と自然（夜長姫）の対立では、人間は自然に勝って人間を救ってから、自然と一体化する。小説は人間の切ない悲しさと残酷とグロテスクの果てに成立する美を結晶させることに成功している。

以上、挙げられた四編の小説は坂口安吾文学世界の説話小説^③という類に帰納できる作品である。説話小説の創作は安吾が生涯続けてきたことである。「風博士」が牧野信一らに激賞されてから、彼は相次いで「閑山」（1938）や「木々の精、谷の精」（1939）などを発表した。戦後、作り上げた「桜の森の満開の下」と「夜長姫と耳男」という二編は、説話小説の頂点に達している。同時に澄み切った虚無の美の極限にも達している。

本論は、筑摩書房『坂口安吾全集』（第1、3、5、6巻）底本として使った。

注 釈

①坂口安吾「日本文化私観」

②「桜の森の満開の下」と「夜長姫と耳男」 井口時男 『ユリイカ』平成20年9月第40巻

第10号)

③福田恒存氏 『坂口安吾選集Ⅲ』『解説』昭23・4、銀座出版社

(平成21年3月31日受理)